

応答

朴 裕河

○朴 5人の方にこれだけ細かい、心のこもったコメントをいただけて、とてもうれしく思います。ありがとうございました。

今回、最初に少しだけでも何か話してほしいと、西先生から言われていました。ところが、(刑事訴訟一審の判決が出た直後であろう)今の時期に、そういう準備ができるかどうか、頭の切り替えができるかどうか、見当がつかみませんでした。そこで、皆さんからの話の後にお答えするようにしたいとお願いして、許していただけてました。

きょう、いろんな問題点をいろんな視点から指摘していただいたので、その個々についてもお話しし、お答えしたいのですが、その前にちょっと——場合によってはその答えになるところもあるのかもしれませんが——、どうしてこういう本を書いたのか、目指しているものは何なのか、それをまずちょっとお話ししたいと思います。

中山さんから、質問というか、疑問として、引揚げ研究と引揚げ文学の研究の境界はどこにあるのかと聞かれました。文学を歴史研究に使っていいのかどうかというようなお話がありました。この本は、ごらんのとおり、作家・詩人による、いわゆる「文学」と言われているジャンルを素材として引揚げを考えた本です。もともと私は文学研究者でありますし、そういう立ち位置での文学テキスト分析を試みました。そういう意味ではまずは純粋な文学論として見てほしいという気持ちがあります。同時に、現在私が渦中にあることもあって、多くの方が『帝国の慰安婦』のことも触れてくださいましたが、『帝国の慰安婦』が受けた批判のうち目立っていたのが「小説ごとき」を歴史を扱う本の中に史料として使っていいのかという批判でした。『帝国の慰安婦』で使った小説は、作家の実体験であるということが文学研究でも証明されているものだけを扱いました。そういう意味では実体験に限りなく近い史料と見ることができるので問題はない(体験にフィクションはあり得ますが、本質は変わらず、事態を理解するための史料として差し障りがない)と思っています。というのも、「文学」というジャンルに関しては、2つのことがいえます。虚構であり、真実と。近代文学というジャンルは、いわゆる「物語」が古くからの英雄譚に見られるように立派で美しい人たちの物語であったことに反して、市井を生きる普通の人々の「内面」により深く触れることから始まりました。その指向性がいわば「告白」を真の文学として讀めるような自然主義や、心境小説、私小説などを生みもしました。いわば小説の形を借りてひとに言えないことを書くジャンルとして成立した経緯があります。そういう意味では、形は虚構、「小説のごとき」といわれる文学でも、かえって公的空間でいえない真実が盛り込まれることは多々あったことなのです。そういう意味では「文学」は虚構だから、歴史を理解するための資料として使えない、というのは当たらない批判だと思っています。

私はそう思って『帝国の慰安婦』にも小説を使って慰安婦をめぐる状況を理解する手段として使ったわけですが(慰安婦の体験談は嘘だ、という日本の人々に向けて、あなたの先祖たち

が書いたものでも慰安婦の悲惨さが語られてますよ、と言うために使ったのでもあります) 私に向けられた批判のほとんどは裁判所にまでそのまま原告側弁護士や検事によって私の「犯罪証拠」として持ち込まれていたもので、仕方なく、ほかのひとたちの意見も借りてきて自分を弁護しました。

例えば、韓国でソウル大の韓国文学者で評論家としても著名な金允植キムユンシクさんという方がいるのですが、その方が元朝鮮人日本兵の小説を扱って慰安婦をめぐる状況を論じながら、彼らの書いたものを「証言」と書いたことがあります。もちろん、小説は言うまでもなく手記にも虚構——うそは入ります。文学研究では、その虚構と事実の間の関係などを探ったりもしますが、小説だからうそだとか、手記とか日記だから真実だとかとは、必ずしも言えない。むしろそうした認識こそが真実ではないということは、文学研究の中では常識になっています。うそのように見せかけながら真実を盛り込むとか、真実のように見せかけながら虚構を盛り込むことは普通にあるわけです。小説を歴史について考える本で使ってはいけないという批判は、こうした文学研究の成果を知らないゆえの批判と考えます。

もうひとり、やはり日本の歴史家で、家永三郎さんという有名な歴史家がいらっしやいますね。その方も、『太平洋戦争』という本の中で、まさに私が使った田村泰次郎の小説を持ってきて、その田村さんと手紙を交わしたという話を交えながら、田村氏が書いているのは事実だと述べてます。公文書などを使ういわゆる実証主義だけでは補えないようなものが歴史の中にはあるので、そういった手記や小説などからたくさん見えてくるものがあるので、歴史家は積極的にそういうものを参照すべきだと指摘してます。

ですから、文学研究と歴史学研究、あるいは文学研究や社会学研究は、それぞれの領域でできることをやりつつ、お互い参照し合うことも必要と考えています。私も社会学や歴史学、政治学などの研究からたくさん学びましたし、参照しながら文学研究をやってきました。ところが、どうも社会学や歴史研究は、文学を少し軽んじる傾向があるように思われます。そうした見方にはさきほど話した文学＝虚構、という考え方のほか、文学は女こどもがやるもの、女々しいと言われてきた時代のジェンダー的バイアスのかかった見方とを考えています。ですから、『引揚げ文学論序説』では『帝国の慰安婦』と違って文学そのものを素材として論じましたが、私の中では、小倉先生のおっしゃるような「人間研究」であり、社会・歴史研究であって、この本でも、文学や映画など二次生産物も素材にしながら、そこから見えてくるものを論じたいとの考えでやってきました。『帝国の慰安婦』で中心的に使ったのは証言集ですが、それにも虚構とはいえないまでも、ヒアリングする人を意識しつつの、偏った証言になったりすることはいくらでもありえます。

ですから、自分の中では対象が異なるだけで、引揚げ研究も、引揚げ文学研究も基本的には異なりません。

ついでに言えば、漱石論を『引揚げ文学論序説』にも一つ入れましたが、純粋な文学論で書いたつもりではあっても、漱石の『明暗』は大正期の日本社会を見るに十分なテキストでもあるのです。こうしたことを、中山さんの質問への答えとして申し上げておきます。

次は、やはりつながる話であって、原さんへのお答えになればと思いますが、この本の意図は、ナショナル・アイデンティティーの政治学に亀裂を入れたかったということにもありま

した。先ほど触れました漱石は私の学位論文のテーマでもありますが、論文題名は『日本近代文学とナショナル・アイデンティティ』でした。後に本にする時は『ナショナル・アイデンティティとジェンダー』にしました。「ナショナル・アイデンティティ」の構築過程への関心を早くから持っていましたが、それは、ただアイデンティティ信仰を破壊したいということではありませんでした。蘭先生もおっしゃったように、私たちが拘束する秩序を構築してきたのは、私たちが日常的に意識させられているナショナル・アイデンティティにあるという考えてきたからで、そうしたことを見ない限り、アイデンティティ信仰による抑圧や悲惨は続くと考えられるのです。

今の政治状況を含めて、人間の葛藤はどのように起こるのかということに対する関心と問題意識が私の中にあります。移動の物語に関心があるのも、やっぱり移動の背景とその後を見ることによって人間の意識の変化や現在の葛藤の根っこを見ることができるところからです。人は、たとえ1年だけであっても、別の地で生活することで衣食住への感覚が変わります。それが、10年になりさらに長くなれば、当然ながらかなり変わってくる。しかし、「帝国」形成による変化は、その後そうした変化を公的な場では認めなかった。つまり、移住者たちにもたらしたそうした変化を直視しない、あるいは直視させないような時代を生きてきました。定住者・非定住者の区分に関しての批判、質問もありましたが、私がこの本で定住者と移住者・非定住者というふうに分けて考えたのは、身体的な定住にすぎません。当然、同じ場にながらも、人は精神的に移動することができる。きょう小倉先生が「多重主体」という、たいへん素敵な概念をおっしゃっていただきましたが、私が少し前から「曖昧主体」や、留保の姿勢、などの言葉で考えている概念と通じていると思いました。私たちは、きょうとあしたが変わらないようで少し違うように、本当は変わりつつあるのだと思っています。ところが、それを見ないでいると、常に変わらない姿を要求する言説によって引き戻されてしまう。そういうふうにさせてしまう力について考えたかったです。そうした力の中には、必ずしもアイデンティティ自体を守ろうとするだけでなく、そうした力を使う人たちが自身を中心にいる体制維持自体が目的である力が多々あります。

「近代」とは、そうした「ナショナル・アイデンティティ」認識を成立させ、「国民国家」を構築してやってきた時代でもあるわけで、純血主義が強調されたのもそうした過程で行われたことでした。たとえば韓国の場合、近代以前はそれまで同じ「民族」といった認識など持つ余地のなかった、貴族と賤民（サンノムと言われていた賤民ではっきりと区分されていた）からなる階級社会があったことをすっかり忘れて、「平等な民族」という考え方が形成され、そうした教育が行われますが、今度はそうした観念に合わない者たちが排除されることが起こったわけです。そうしたとき、民族という区画の中に残りえた者の特権意識は、排除される者たちを差別し、支配し始めた。ただの差別にとどまらず、差別し、排除し、さらに（共同体の）「敵を殺す」といった、殺害にまで及ぶことになったわけです。そういうことを喚起し、異議申し立てを試みたつもりです。そういう意味では近代国民国家形成とナショナル・アイデンティティの形成とそのゆがみについて考えた『ナショナル・アイデンティティとジェンダー』という10年前の本と問題意識の上ではつながっています。

同時に、最近思うのは、フェミニズムやジェンダー論も少し変わるべき時期に来ているので

はないか、ということです。例えば、『帝国の慰安婦』の中で日本人軍人と慰安婦の恋愛について書いたことで激しく非難されましたが、それはきょう最後に原さんが話した階層の問題への指摘ともつながる批判、つまり力関係の異なる人たちを同じ位相において考えていいのかということでもあるでしょう。しかしまさに、なぜそのように考えるのか、つまり「日本人軍人」というのは果たして慰安婦と比較した時、変らない上位の権力関係にあるのかという疑問こそが私の思考の出発点です。言葉を代えて言えば、「被害者」「加害者」の持つ位相は必ずしも固定しているわけではない、ということです。そうしたことをまったく考えないような「加害者＝権力者」という認識や糾弾は暴力になりえますし、そのように発言させてしまう思考はどこから来ているのかということが現在の私の関心事なのです。ここ10年、自分の中でもジェンダー認識はすこしずつ変わってきてます。ジェンダー論に依拠してものを考えるフェミニストの中で、ナショナリズム的思考を続けるのみならず、ナショナリズムが拡大した帝国主義者と同じような発想をしている人たちがいるのはなぜか、という疑問故のことでもあります。そういう人たちは自らの手にした武器がいつのまにか凶器になっていることに気づかない。ヒューマニズムにならないフェミニズムはどうしても信頼できないのです。せっかく手にした武器を捨てたくないのわかりますが、武器は正しく使っているのか時々点検すべきです。女性は弱者、被害者は弱者、と言う認識は基本的には正しいですが、そうした「正しい」認識も常に守ることに執着すると、いつのまにか攻撃や暴力を正当化する手段になるのです。つまり、弱者のための概念もいつのまにか、自らの強者化に気づかず、強者の概念になることがあり得る。そうしたことに気をつけないと大切な概念、弱者や女性の人権を守るための大切な武器だった概念が、劣化することになってしまうのです。そして、浅はかな形で使われることになる。私はそうした現象を最近「概念の浅薄化」として指摘したこともあります。この本の中ではそうした考えを書くことはしませんでした。それは特にこの2年半の間、自分に起こった裁判という事態と向き合いながら分かったことでもあります。

引揚げを考えると、どこからどこまで何を引揚げというべきなのか、ということも念頭におかないといけないのですが、私としては、日常、いつもの日常が突然非日常になる事態かと考えます。そうしたときに何が起こるのかを、必ずしも引揚げ研究だけでなく、そうした事態を引き起こす背景や現場やその後の変化について、いろんな角度から私たちは考えるべきと考えてます。

例えば、ふだんの差別意識は、非常事態や戦争など非日常的な空間で人を殺させます。蘭先生が復員兵の子供であることを話すのはすこし後ろめたいことだったとおっしゃいましたけれども、それは、そういうふうにさせる雰囲気、差別があったからこそでしょうし、そうした差別は果たして正しいのか、あるいは暴力ではないのかといったことを、これからも考えないといけないと思います。つまり加害者の子供に対して行われる差別は正しいのか。しかもその差別の主体は「正義の人」だったりする。そうしたことを考えることがこれまではあまりなかった。私はそうしたことを考えたかったわけですが、すると、必ず激しい抵抗が来る。裁判という事態もそうした抵抗の一つです。

それは、真実と事実の間、あるいは文学と歴史との間、について考えることでもあります。いわゆる事実、つまりそこで何が起こったのか、そのディテールはどうなのかということにつ

いてわたしたちはできるだけ正確に知る必要があります。しかし同時に、同じ事実を前に、どう思うのかということにおいて、人は必ずしも同じではありません。同じじゃないのは、その人の経験や性格や感性など、いろんな条件によって変わってくるものだからです。

にもかかわらず、やはり一つの「正しき」あり方というものが、長い間私たちを支配してきたのではないかと思うわけです。例えば、この本では日本人による引揚げ文学だけを論じましたが、同じような経験をしている満州からの朝鮮人引揚者が書いた韓国語の短編小説があります。そこには、日本人の引揚者に対して異なる態度を取る朝鮮人のおばあさんと少年が出てきます。北朝鮮の清津が舞台ですが、満州から南へ逃げてきた日本人たちがたくさんいる中で、そうした日本人をソ連軍に密告する少年と、日本人に食事を与えるおばあさんが対照的に描かれます。一つの事態を前に、暴力を振るうひともしれば、そうじゃない人もいます。当たり前のことですが、そうしたことを想起することはとても大切なことと考えます。そうした異なる選択をさせるものは何か、について考えるべきと思うのです。それこそが、「事実」を見ること以上に大切なことではないでしょうか。もちろん言うまでもなく、そのためにも「事実」をできるだけ詳しく正確に見ることは大切です。

これまでお話ししたことでお答えになっているかどうか心もとないですが、もう少しだけお話しすることで、残っている質問に対するお答えに代えたいと思います。

先程の、事実と真実の間についての話が、蘭先生のおっしゃった、「側面の歴史」と「正面の歴史」への応答になればいいなと思いますが、そのことはつまりは「当事者」中心の歴史、ということかと思えます。

後書きにも少し書いたかと思いますが、慶州で生まれた森崎和江さんが、国交正常化後に韓国を訪ねて、自分のお父さんの教え子でもあった人たちと会った経験を振り返るエッセイがあります。その元教え子たちはかなりのエリートになっていて、韓国社会の中心部になっていました。政治家や詩人になっているわけですが、会って交わした話が大変興味深いです。両方も心を痛めている。その人たちこそいわば「当事者」であるわけですが。彼らは、つまり日本統治時代の元学生たちは、森崎さんのお父さんが何か反体制的なことをやっていた学生たちを警察に差し出さないでくれたなどの話をします。そして、これからいろいろ話し合っ、よい未来を築きましようと話しています。それが1つ、ちょっと参考にしたい話です。

もう一つお話ししたいことは、韓国の親日派の話。きょう出ましたが、解放後はむしろ「親日派」への抑圧はそれほどひどくなかった、という話があります。ところが、20年後ぐらいに、いわゆる「親日派」の息子が故郷に帰ってきたときに、あれは親日派の息子だと言われて殺された。そうした話を書き残した人がいるのですが、これこそまさに、先ほどお話ししました、一種の「概念の浅薄化」現象と考えます。つまり、当事者じゃないがゆえに暴力的になり得る。歴史を概念的に考え、現場で起こっているいろんなことを全て切り落として考えることによって歴史は単純化され、人は暴力を働くことができる。歴史をとってもシンプルに裁断しえるのもそうした延長線上のことと考えます。

小倉先生も歴史学への問題提起をおっしゃってくださいましたけれども、私もそういう意味で、今日お話ししたことが今日いただいた質問に対する答えになっていれればと思います。また、

そういった意味で、多重主体的方向を目指すことは、これから本当に大切なことになると思っています。

あと、熊本先生のお話もたいへんおもしろく、映画にしたらという話もされました。この本の中で後藤明生論を2本も書いていて、引用もかなり長くしていますが、それはやっぱりそこを読んでもらいたくて書いたようなものなんですね。例えば、リング畑で少年が目を覚ましたときの状況や気持ち。あと、朝鮮人の子供が油を買いに来た時の、日本人少年と力を合わせて下手な日本語で量を数える様子など。こういうことこそ本当に映画化したらいいなというふうに思っています。そうしたことは今日話した、歴史の公的「事実」からは取り外されることで少し、取るに足らない小さなことと思われがちですが、そこにこそ、いわゆるデータや史料から見えてこない大切な事柄が示されていると考えます。

つまり、いわゆるデータからは見えてこない、内面や感性まで見てこそ、本当のポストコロニアルになるのではないかということです。ところが、そういう多様さ（多様さという単語はあまり適切ではありません）を語ると、そういうことは事実を水増しするものだとか、真実を見えなくする、などの反論が必ず出てくる。しかし、分析されるべきはむしろそういった思考のほうだと思います。

金洙暎^{キムスヨン}さんの話にも触れていただきましたが、少しつけ加えますと、韓国で一番有名と聞いていい現代詩人ですが、植民地時代を生きた彼は、60年代に日本語の散文をそのまま雑誌に投稿したことがあるといます。すぐに送り返されたようですが、そういう人がいた。解放されて20年も立った時点でこうしたことがあったことは多くを象徴しています。しかし、そうしたことにちゃんと向き合うことを、これまでの韓国はしてこなかったのです。

中山さんのおっしゃった、「作家の特権性」については、先ほどの言葉でお答えになっていることを願います。作家のものは全部いいとか、手記は全部悪いとかではなく、後書きにも書きましたように、一つ一つ個別に判断されるべきだろうと思います。

李恢成をこの本で外したのは、10年前ぐらい前に書いているからでした。批判でした。そういうこともあって、今回は日本人だけを取り上げたわけです。

それから、中山さんはこの本は新しくないとおっしゃいました。そのとおりのと思います。しかし、一番最初に論文にしたのは10年まえ、2008年の小林勝論です。2002-3年ぐらいから関心を持っていましたが、そうになりました。あのころは、引揚げ研究もまだ始まったばかりの時期でした。この本に入れた湯浅克衛論は、引揚げ自体の勉強をしようにも、その頃研究が多くなかったので自分なりにいろいろ調べて書いたものです。湯浅の「移民」論は、文学論というより引揚げ論として書いたのですが、そういう意味では序論として入れてもよかったと思います。しかし、本にする際に作家論が少ないので、そういう配置になったかと思います。ですから、そういう意味では新しくないとと言われても仕方がないと思うと同時に、私なりの早くからの手探りの痕跡、とは考えています。さらに、序文は日本近代文学会で発表したものでありまして、引揚げとの関連で論じられる作家がまったくいなかった、という状況があります。つまり著名な作家の中で引揚者が多かったのに、近代文学関連書には出身として1行ぐらい書いてある程度。それほどその意味は軽く扱われました。それは、戦争に対する認識はあっても、帝国主義——支配と占領に対しての認識が近代文学会の中にうすかったことを示すものであって、少なくとも

応答（朴）

も日本近代文学会に対しては問題提起を初めてしたつもりです。これが、あえていえば「新しい」への抗弁になるでしょうか。

きょう、皆さんの指摘から本当にいろいろ学び、刺激を受けました。特に、わたし自身3世のことは全く考えてなかったので、盲を開かれた気がします。私は韓国人として、女性として見えてきたものを書いただけであって、やっぱりこの問題に関心を持たれるみなさん、それぞれにしか見えない、みなさんでないと考えられないものがきっとあると思います。異なる立ち位置から見えて来たことを今後も学ばせていただくのを楽しみにしています。

最後に、いま、『歴史との向き合い方』という本を書いてまして、それはある意味で、きょうご質問のあった、真実と事実の間の問題を考えつつのものでもあります。ですから言いたりなかったことはそこで書けるのではないかと思います。まとまらない話で申しわけない気持ちですが、すこしでも、私の意図や目指したものへの説明、さらに、5人の方々の質問・疑問へのお答えになっていればと思います。

とりあえず以上です。ありがとうございました。（拍手）

